

# 世界に誇る「一流の田舎」を目指して。

## SDGsが地方創生につながる。



田中幹夫 南砺市長

### —SDGsに取り組む意義は。

人口減対策も含めて地域が抱えている大きな問題の解決を目指すうえでのゴールをSDGsは示してくれます。SDGsに取り組むことが地方創生につながると考えています。昨年スタートした第2次総合計画ではSDGsの観点で横串のような役割を果たしています。教育環境の充実やジェンダーギャップ解消、公共施設の再編といった施策もSDGsを指針に持続可能な社会をつくるために必要だと盛り込まれました。

ジェンダーギャップの解消を総合計画に書き込んでいる自治体はまだ少数なのですが、南砺市の課題として若い女性が少なく、Uターン率を高めるためにも性差や年齢、国籍などにとらわれずに多様な住民が活躍できる環境をつくらなければならぬと考えました。

### —理念の浸透に手応えはあるか。

最近では市民のみなさんや職員がSDGsの視点を採り入れた企画を自発的にどんどん出してくれます。フェアトレードの商品を扱う市民マルシェや障害者アートの作品展の開催などはその一例です。特に若いみなさんの意識は高く、「わたしたちの街はSDGs未来都市だ」と故郷を誇らしく思うきっかけにもなっているようです。地域の課題は行政だけでは解決できません。SDGsには企業や団体も含めて多くの人がそれぞれ取り組んでおり、応援していきたい。市がSDGs未来都市になって率先したことで周囲の動きが加速している感じがあるのはうれしいですね。

### —“南砺モデル”の確立が期待される。

南砺市民は無意識のうちかなり「SDGsな暮らし」をしていると思います。伝統的に「土徳文化」や「結」の精神が根づいている南砺の暮らしが持続可能なものだからです。豊かな山が豊かな水田や海をつくるという自然のつながりを分かっている人も少なくありません。「それはSDGsだとか置き換えられますよ」と伝えてあげられるとよいかもしれません。計画に沿ってSDGsを推進していますが、事業の効果ももっと上がるように市民の理解をさらに高められるように努めていきます。同時に未来都市としてモデル事業を全国に発信しているようにしっかり取り組んでいきます。



## SDGs 未来都市 なんと

### SDGsとは

SDGs (Sustainable Development Goals) は2015年9月に国連で採択された「持続可能な開発目標」。貧困や飢餓の撲滅、福祉や教育の格差解消、自然環境の保全など2030年までに達成すべき世界共通の17のゴール(目標)と169のターゲット(具体的目標)を定めている。「だれひとり取り残さない」をスローガンに2016年1月に発効した。

## SDGs未来都市に選定。

南砺市はSDGsの達成に積極的に取り組む「SDGs未来都市」に選定されている。SDGsが国連で採択される以前の2013年から「エコビレッジ構想」を掲げ、豊かな自然と支え合いの文化を生かした持続可能なまちづくりを目指してきた。SDGsの理念のもと、「誰もが笑顔で暮らし続けられる『世界に誇る一流の田舎』」を目標にその取り組みを活発化させている。

### 南砺市のSDGs これまでの歩み

SDGs未来都市は内閣府が2018年から選定している。2020年までに全国93自治体が選定され、富山県と富山市も含まれている。南砺市は2019年に選ばれた。「『南砺版エコビレッジ事業』の更なる深化」と題したプロジェクトは未来都市の中でも先進的な取り組みと評価され、「自治体SDGsモデル事業」30件のひとつに認定されている。

エコビレッジ構想は2013年3月に策定された。東日本大震災を機にエネルギー供給や地域コミュニティのあり方への関心が高まったのがきっかけ。南砺の自然環境や伝統文化を生かしながら、再生可能エネルギーの開発や農業・林業の活性化、観光振興を図るとし、ヒト、モノ、カネなどが地域内で循環することで持続可能な暮らしを目指すもの。医療福祉や人材育成への取り組みも盛り込み、まちづくりの方向性が示されている。

2016年に発効したSDGsはその理念がエコビレッジ構想と重なる部分が多いため、2019年に未来都市への選定を提案して認められた。市では2019年4月から住民主体の自治を目指して「小規模多機能自治」をスタート。小学校区ごとに自治振興会や社会福祉協議会、公民館の活動を一本化して予算を割り当て、地域の問題解決を目指す。併せて各地区組織の活動を支援する機関「なんと未来支援センター」を設置。市民の自発的な活動を資金面から支援する「南砺幸せ未来基金」を2019年2月に開設した。人口減少が危惧される今後のまちづくりのカギを握る事業として「市SDGs未来都市計画」に位置付けられている。

SDGsは市政の指針となっており、昨年度にスタートした総合計画にも目標5に沿ってジェンダーギャップの解消を新たな観点として盛り込んだ。すべての事業は予算編成時からそれぞれがSDGsのどの目標の達成に寄与するか明確にしている。



SDGs未来都市 選定証を受け取る田中市長(左)



循環型社会を推進するため「交流の炭素」を改修



公募で選ばれた南砺市SDGsマーク

## 南砺市の資源を活かし未来へ

### エコビレッジ構想

南砺市は面積の8割が森林という豊かな自然のなか、散居村が広がる平野部から世界遺産「五箇山合掌造り集落」がある山間部まで、懐かしい日本の原風景が広がる。人口減少や



南砺市観光協会 提供

地球温暖化などの変化に対応するため、2013年に「南砺市エコビレッジ構想」を策定し、「小さな循環による地域デザイン」を基本理念とした。

森林資源の持続的活用を進めるため、森林保全のための道路網の整備、公共施設での木材利用、木くずをペレットとして燃料として利用を進めている。今後は地域産材の住宅や再生可能エネルギー、安心・安全な地場産食材など地域内自立循環モデルを加速させる。



## 住民のニーズをくみ取り活性化

### 小規模多機能自治

伝統的に継承されてきた支え合いによるまちづくりの取り組みを通じて、住民参加による自治組織形成を推進するため「小規模多機能自治」を推進。自治振興会と社会福祉協議会、公民館を一体化し、市からの活動費を活用し、地域活動や通所型サービスの提供などを行っている。

人口減少や高齢化が進み、個別化複雑化する市民ニーズに行政での対応が困難になる懸念から、地域が必要な事業を自ら実践できる仕組み



発表会で活動の工夫や課題などを学ぶ住民団体

として2019年度から南砺市31地区で導入されている。住民と行政をつなぐ中間支援組織「なんと未来支援センター」が活動を伴走支援している。

## 多様な団体と連携し、相乗効果を図る

### 企業・団体とパートナーシップ

SDGsの課題解決のためには、自治体や住民だけでなく、多様な団体が連携することで相乗効果が生まれ、地域課題の同時解決が望まれる。

2020年8月には、北陸電力、北陸電力送配電と連携協定を結び、再生可能エネルギーや電気自動車の活用を図る。10月には、富山銀行と地域包括連携協定を締結。コミュニティファンドや地域通貨の研究で連携した成果を活かし、産業の振興や企業支援、金融に関する情報提供などを行う。

となみ青年会議所は、2019年より連携協定を結び、12月にコロナウイルス収束後の観光客誘致のため、魅力ある施設を紹介する映像コンテンツ「オンライン旅行 ナントリップ!」を制作。市のホームページなどで閲覧できる。



映像コンテンツを紹介する2020となみ青年会議所メンバー